





## 鎌倉時代

市内には、平安時代後期の11世紀頃から設置された、皇室や有力な寺社の領地である荘園、遠江国の領地である国衙領、伊勢神宮の領地である御厨がありました。大東・大須賀区域は、現在の御前崎市から袋井市にかけて広がる笠原荘に含まれ、掛川区域には荘園・国衙領・御厨が数多く設置されていました。

荘園は、開墾や灌漑などの開発を行って領地を拡大した領主が、貴族や寺社に領地を寄進したことにより発生しました。領地を寄進した領主は、荘園で土地と農民の管理を行い、自衛の手段として武装することもありました。また、平安時代末期の平氏政権は、各地の荘園等に家来になった武士を地頭として派遣し、支配に当たらせました。

鎌倉幕府の家臣である原氏、西郷氏、内田氏は、このようにして誕生した武士と考えられます。原氏は原田荘、西郷氏は西郷荘、内田氏は菊川市から掛川市にかけて存在した内田荘を本拠とする武士です。

掛川市の周辺には、荘園に関わると考えられる遺構が確認された例があります。

玉越遺跡（磐田市）は、幅約2mの溝によって一辺約35mのほぼ正方形に区画された内側から、掘立柱建物跡13棟と井戸等が発見されました。平安時代末の12世紀前半から鎌倉時代初めの13世紀前半の有力農民の屋敷跡の可能性を指摘する人もいます。また、宮下遺跡（牧之原市）からは、12世紀後半から13世紀前半の、溝に囲まれた屋敷跡が発見されています。

市内には、荘園領主を指す本所・領家、現地管理にあたる荘官の職名である公文（中地区）の地名が残っていますが、玉越遺跡・宮下遺跡のような遺構は確認されていません。しかし、この頃の集落の一部が発見されていますので、ここで紹介します。



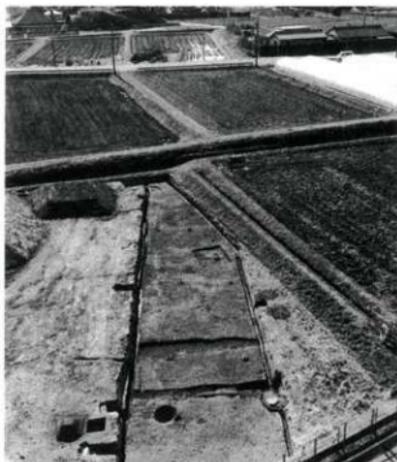
荘園等の分布図

### 七社神社遺跡 (大坂)

扇状地に立地し、この時代の溝や小河川等が確認されましたが、住居跡は発見されませんでした。

12世紀中頃から13世紀中頃にかけての山茶碗、小碗、小皿とともに、中国製の磁器である白磁・青磁が出土しています。山茶碗は、現在のどんぶりに似た形の茶碗のことです。

白磁・青磁の量が、遠江の他の集落遺跡に比べて多く、墨で字を書いた陶器も出土していることから、周辺に笠原荘に関わる有力者が存在した可能性が考えられます。



七社神社遺跡の様子

### 兼信遺跡 (海戸)

丘陵の斜面から平野にかけて分布する遺跡で、幅0.6～1.1m、長さ18.6mの溝1、柱穴18、自然流路等が発見されましたが、建物跡は明確ではありません。

12世紀から13世紀の山茶碗・小碗・小皿が発見されました。

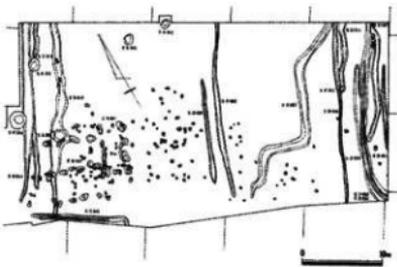


兼信遺跡の様子

### 糸織遺跡 (干浜)

海岸から約2.4kmの標高約6～8mの砂丘に立地します。遺跡からは、南北方向にのびる溝跡と直径約0.8m、2.1mの土坑(穴)、柱穴等が発見されましたが、建物跡に復元できるものではありませんでした。

出土遺物には、山茶碗、小皿、かわらけ、土鍋等があり、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられます。



糸織遺跡の様子

## 林遺跡（吉岡）

原野谷川沿いの平野から発見され、遺構は、溝3、掘立柱建物跡1、土坑等があります。溝は、南北方向に長い調査区のほぼ中央から南側に向け、約20m、15mの間隔をおいて発見されました。掘立柱建物跡は、調査区のほぼ中央の溝から約2mの間隔をおいて、溝と平行するように確認されました。建物跡は、東西3間×南北2間、9.6m×5.4mの大きさがあり、床張りの建物であったと考えられます。溝の北側からは、直径約1mの土坑が発見され、中からお供えとみられる山茶碗が発見されたことから、墓穴と考えられます。

遺跡からは、13世紀に位置づけられる山茶碗、青磁片等が出土しています。原田荘の荘園内にあたり、荘園に関わる人物の屋敷及び墓地と推定されます。



林遺跡の様子

## 牛岡遺跡（八坂）

逆川によって形成された丘陵に立地していて、縄文時代、奈良時代から江戸時代の集落が確認されています。この時代の遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑等があります。掘立柱建物跡は10棟あり、平面形が1間×2間、2間×2間、大きさは4m×4m程度のもので大部分です。庇が付く建物跡が2棟発見されていますが、床を張った構造ではないため、小屋のような性格が考えられます。建物の規模が小さく散在していることから、近くにより拠点的な集落、あるいは屋敷が存在するのではないかと考えられます。遺物には、山茶碗、小皿、土師器、輸入磁器等があります。

集落は、奈良時代から12世紀前半は比較的小規模で、12世紀後半から集落は拡大したと考えられます。そして、13世紀末から集落は縮小に転じ、14世紀は極端に小規模なものであったと推定されます。



牛岡遺跡の様子

## 室町時代

鎌倉幕府滅亡後の1335（建武2）年、北条氏の再興を図る北条時行と足利尊氏・直義兄弟が東海道の難所小夜中山で合戦に及びました。さらに、1351（正平6・観応2）年には、足利尊氏・直義の兄弟の対立から、小夜中山が再び合戦の場となりました。それまで掛川が戦場になることはありませんでしたが、いよいよ武士の争いに巻き込まれることになりました。

また、1355（正平10・文和4）年には、貴族が所有する市内の荘園が勝間田氏によって奪われかけることも起きました。

15世紀中頃の1459（長祿3）年、現在の袋井市・掛川市周辺の武士が、遠江国の守護である斯波氏の内紛に乗じて挙兵しました。15世紀の終わり頃になると、駿河国の守護である今川氏が遠江国に攻め入ってきました。その後、1581（天正9）年の高天神城の落城まで、市内では戦が繰り返されました。

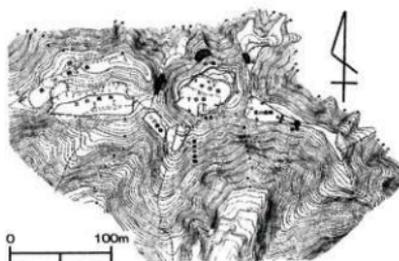
市内には、このような歴史を物語る城跡が残されています。ここでは、そのうちのいくつかを紹介します。

### 高藤城跡（本郷・細谷・遊家・家代）

原野谷川沿いの平野を見下ろす丘陵に築かれた城で、東西約350m、南北約200mの範囲に、立て籠もるための曲輪と防御のための堀切・土壁がありました。曲輪からは、掘立柱建物跡が発見されました。

城は、原田荘の一地頭から勢力を伸ばした原氏によって築かれました。

原氏は、1497（明応6）年に北条早雲率いる今川軍に攻撃され没落しました。発掘調査で15世紀後半から16世紀前半にかけての陶器、中国産の磁器等が発見されていて、没落した原氏が、その後も生き延びたことを示しています。



高藤城跡 ※黒網掛けは堀切を示す



掘立柱建物跡の様子

## 掛川城跡（掛川）

16世紀の初頭、駿河の守護大名今川氏が重臣朝比奈氏に命じ、平野に突き出た丘陵の先端に築かせました。

その後、1590（天正18）年に城主となった山内一豊が人拡張を行いました。拡張する前の掛川城は、後の本丸・二の丸・三の丸、それに中の丸の部分と考えられ、東西約350m、南北約350mの範囲と推定されます。

この頃の遺構は、大守丸の南東部分の縁辺から検出された大型土坑群があります。これは、長さ1.2～2.1m、深さ1～1.4mの穴が、約1mの間隔で並んで発見されました。防御に関係する施設と考えられます。

また、本丸の下層からは、16世紀初頭の掛川城の造成により埋められた墓地が発見されました。

現在の中央図書館のあたりは、朝比奈氏の屋敷跡と推定されます。

本丸東側の三日月堀・十露盤堀・内堀は、朝比奈氏の後の城主で徳川氏の家来であった石川氏によるものと考えられます。

## 杉谷城跡（杉谷南1丁目・2丁目）

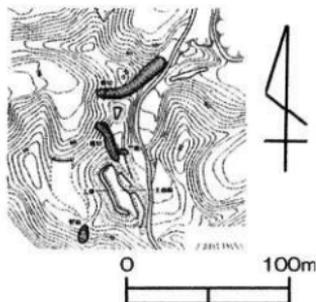
掛川城の南東約2kmの丘陵に立地し、東西約100m、南北約150mの範囲から、曲輪2、土塁1、堀切2、塹堀2が検出されました。1568（永禄11）年から69（永禄12）年の掛川城攻めにあたり、徳川方が築いた城と考えられ、16世紀後半に位置づけられる陶器が発見されています。



掛川城の推定範囲 ※逆川から斜線部分までが推定範囲  
黒網掛けは堀を示す



天守丸の大型土坑群の様子



杉谷城跡 ※黒網掛けは堀切・豎堀を示す  
高天神城跡（上土方嶺向・下土方）



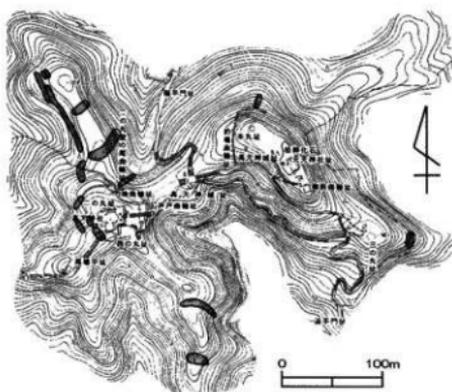
堀切の様子

築城の年代は定かではありませんが、16世紀の初頭には、遠江に侵攻していた駿河の今川氏の城であったことが確認されています。

城は、小笠山から延びる丘陵の先端に造られていて、東西約 500m、南北約 450m の範囲に及びます。城の中央から東の本丸側と、西の二の丸側では構造が異なります。本丸側は、敵が攻められないように山裾を崖状に削った切岸が多用され、堀切・豎堀はほとんど見られません。一方、二の丸側はあちこちで堀を見ることができます。特に、二の丸の西側の斜面には長大な横堀が存在します。この部分は、傾斜が他に比べて緩やかで敵に攻められ易いことから、堀で守りを固めていると考えられます。この本丸側と二の丸側の構造の違いは、年代の相違によるもので、本丸側が古く、二の丸側が後から付け加えられたと考えられます。

城跡は、発掘調査が進んでいて、曲輪の様子がわかります。本丸は、北側から西側の縁辺に土塁があり、その内側から掘立柱建物跡と礎石建物跡が発見されました。本丸西側の的場曲輪からは、石敷きの建物跡が発見されています。二の丸側では、礎石と柱穴が発見され、礎石建物、掘立柱建物跡の存在が想定されます。

城跡からは、調理用のすり鉢、土鍋、水溜め用の甕、天目茶碗、中国産の青磁・白磁等の陶磁器、鉄砲玉等が発見されています。

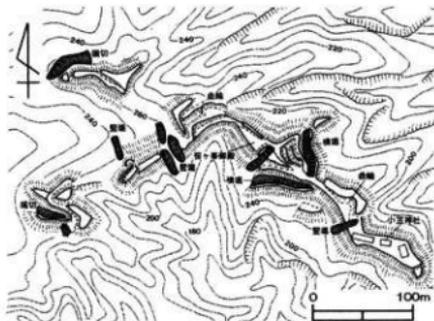


高天神城跡 ※黒網掛けは堀切・豎堀・横堀を示す

### 小笠山砦跡（入山瀬・板沢）

小笠山の中心に位置し、東西約400m、南北約200mの範囲に、曲輪、上塁、堀切、堅堀、横堀が良好に残っています。

1568（永禄11）年、徳川家康が今川氏真の立て籠る掛川城を攻めるために砦を構え、1577（天正5）年、高天神城を攻めるために改修したと伝えられています。

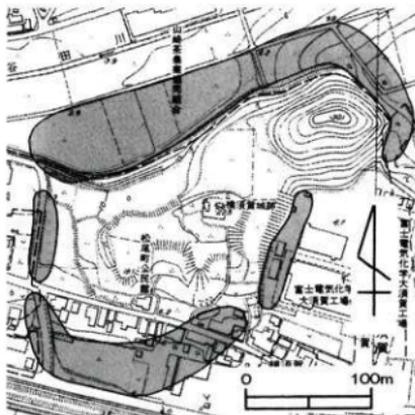


小笠山砦跡 ※黒網掛けは堀切・堅堀・横堀を示す

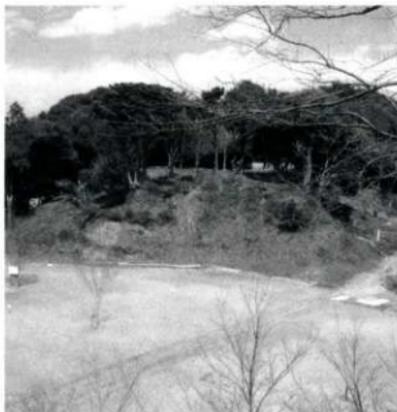
### 横須賀城跡（山崎・横須賀・西大淵）

武田氏に奪われた高天神城を奪還する拠点として、徳川家康の命を受けた大須賀康高によって1580（天正8）年に築られました。この時に造られた城は、現在の松尾山から本丸辺りまでの東西約300m、南北約250mの範囲と推定されます。

1590（天正18）年の豊臣秀吉の天下統一により、横須賀城には豊臣配下の武将が入り、大規模な整備を行ったため、築城当時の遺構・遺物はほとんど発見されていません。また、松尾山と本丸に挟まれた北の丸は、松尾山より約11m、本丸より約7m低くなっています。これは、後に横須賀城が政治拠点として整備されていく過程で、切り崩されて土は城の造成に使用され、できた平坦地に建物が建てられたものと考えられます。



横須賀城跡推定範囲 ※黒網掛けは堀を示す



本丸から望む松尾山の様子

年

表

時代	西暦	和暦	市内のできごと	全国のできごと
鎌倉	1185	文治元		平氏一門、壇ノ浦で滅亡
	1192	建久3		源頼朝、征夷大将軍に任じられる
	1221	承久3		鎌倉幕府打倒の承久の乱が起る
南北朝	1333	元弘3・正慶2		鎌倉幕府滅亡
	1335	建武2	北条時行と足利尊氏・直義が小夜中山で合戦	
	1346	正平元・貞和2	原光高が原田荘内の所領を安堵される	
室	1351	正平6・観応2	足利尊氏軍と足利直義軍が小夜中山で合戦	
	1392	元中9・明德3		南北朝の合一
	1459	長祿3	遠江今川氏を盟主とする武士が挙兵	
町	1467	応仁元		応仁・文明の乱が始まる
	1476	文明8	駿河守護今川義忠、横地氏・勝間田氏を滅ぼす	
	1497	明応6	北条早雲率いる今川軍が、原氏を攻撃する	
安土桃山	1508	永正5	今川氏親が遠江守護職に任命される	
	1543	天文12		鉄砲伝来
	1568	永祿11	徳川家康、掛川城を攻める	
安土桃山	1569	永祿12	各和氏、徳川方に攻められ自害	
	1571	元龜2	武田信玄、高天神城を攻める	
	1572	元龜3	武田信玄、各和城を攻める	
安土桃山	1573	天正元	掛川城主石川家成ら、各和城を武田から奪回	室町幕府滅亡
	1574	天正2	武田勝頼、高天神城を攻め、開城させる	
	1580	天正8	高天神攻めの拠点、横須賀城がほぼ完成	
	1581	天正9	高天神の城兵、城外に打って出て全員討死	
1582	天正10		武田勝頼、信長軍に攻められ自刃	

## 開発予定地内に遺跡はありませんか。 工事計画の前に確認してください。

掛川市内には現在702遺跡が知られています。遺跡(埋蔵文化財)は、私たちの心のふるさと、であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、『文化財保護法』により、遺跡のある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などをする場合には、事前に文化庁に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をせずに工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった——ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会社会教育課にご相談ください。

なお、教育委員会・図書館・支所には、市内にある遺跡の様子を示した『遺跡地図』がありますので、工事を計画する前に必ず確認してください。

掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係  
電話(0537)21-1158